

§10 de Rham コホモロジー群 (2)

de Rham コホモロジー群を計算する上で基本的な 2 つの事実を紹介する。

多様体 M, N のあいだに二つの C^∞ 級写像 $f: M \rightarrow N, g: M \rightarrow N$ が与えられているとする。問題 9.2 で述べたように、これらは de Rham コホモロジー群のあいだに $f^*: H_{\text{dR}}^k(N) \rightarrow H_{\text{dR}}^k(M), g^*: H_{\text{dR}}^k(N) \rightarrow H_{\text{dR}}^k(M)$ という線型写像を誘導する。

いま、 C^∞ 級写像 $F: M \times [0, 1] \rightarrow N$ であって^{*}、 $F(x, 0) = f(x), F(x, 1) = g(x)$ なるものが存在するとき、 f と g は C^∞ ホモトピックだといい、ここでは $f \simeq g$ と書く。

定理 C^∞ 級写像 $f: M \rightarrow N, g: M \rightarrow N$ が C^∞ ホモトピックならば、これらが de Rham コホモロジー群のあいだに誘導する写像

$$f^*: H_{\text{dR}}^k(N) \rightarrow H_{\text{dR}}^k(M), \quad g^*: H_{\text{dR}}^k(N) \rightarrow H_{\text{dR}}^k(M)$$

は、すべての k について一致する。

この定理については、Lee[†] の 15 節、Tu[‡] の 27 節・29 節などを参考にせよ。

10.1 多様体 M, N が C^∞ ホモトピー同値であるとは、 C^∞ 級写像 $f: M \rightarrow N, g: N \rightarrow M$ であって、 $g \circ f \simeq \text{id}_M, f \circ g \simeq \text{id}_N$ なるものが存在することをいう。 M と N が C^∞ ホモトピー同値であるとき、de Rham コホモロジー群のあいだに線型同型写像 $H_{\text{dR}}^k(M) \cong H_{\text{dR}}^k(N)$ があることを証明せよ。

10.2 多様体 M とその部分多様体 N に対して、 N が M の C^∞ 変位レトラクトであるとは、以下の条件をみたす C^∞ 級写像 $F: M \times [0, 1] \rightarrow M$ が存在することをいう[§]：
 $f_t(x) = F(x, t)$ とおくと、 $f_0 = \text{id}_M, f_1(M) \subset N$ で、かつ任意の t に対し $f_t|_N = \text{id}_N$ 。

(1) N が M の C^∞ 変位レトラクトならば、 M と N は C^∞ ホモトピー同値である。

理由を述べよ。

(2) $n \geq 2$ とする。 S^{n-1} (単位 $n-1$ 次元球面) は $\mathbb{R}^n \setminus \{0\}$ の C^∞ 変位レトラクトであることを示せ。

^{*}写像 $F: M \times [0, 1] \rightarrow N$ が C^∞ 級であるとは、 $\varepsilon > 0$ をうまくとって、 F を C^∞ 級写像 $\tilde{F}: M \times (-\varepsilon, 1+\varepsilon) \rightarrow N$ へと拡張できることだと約束する。

[†]J. M. Lee, *Introduction to Smooth Manifolds*, Graduate Texts in Mathematics 218, Springer, 2003.

[‡]L. W. Tu, *An Introduction to Manifolds*, Second Edition, Universitext, Springer, 2011.

[§]「 C^∞ 強変位レトラクト」とよぶこともある。

次に、 M を多様体とし、 U, V を M の開集合であって $M = U \cup V$ であるようなものとする。以下では $U \cap V, U, V, M$ という集合から得られる 4 個の包含写像

$$\begin{aligned}
 i_U : U &\rightarrow M, & i_V : V &\rightarrow M, \\
 j_U : U \cap V &\rightarrow U, & j_V : U \cap V &\rightarrow V
 \end{aligned}$$

を考える。これらを用いて次のように定義する。

$$\begin{aligned}
 (i_U^*, i_V^*) : H_{\text{dR}}^k(M) &\rightarrow H_{\text{dR}}^k(U) \oplus H_{\text{dR}}^k(V), & [\omega] &\mapsto (i_U^*[\omega], i_V^*[\omega]), \\
 j_U^* - j_V^* : H_{\text{dR}}^k(U) \oplus H_{\text{dR}}^k(V) &\rightarrow H_{\text{dR}}^k(U \cap V), & ([\alpha], [\beta]) &\mapsto j_U^*[\alpha] - j_V^*[\beta].
 \end{aligned}$$

定理 各 k に対し連結準同型とよばれる線型写像 $\delta: H_{\text{dR}}^k(U \cap V) \rightarrow H_{\text{dR}}^{k+1}(M)$ が存在して、次の列が完全列となる (**Mayer–Vietoris 完全列**)。

$$\begin{array}{ccccccc}
 0 & \longrightarrow & H_{\text{dR}}^0(M) & \xrightarrow{(i_U^*, i_V^*)} & H_{\text{dR}}^0(U) \oplus H_{\text{dR}}^0(V) & \xrightarrow{j_U^* - j_V^*} & H_{\text{dR}}^0(U \cap V) & \xrightarrow{\delta} \\
 & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & \\
 & & H_{\text{dR}}^1(M) & \xrightarrow{(i_U^*, i_V^*)} & H_{\text{dR}}^1(U) \oplus H_{\text{dR}}^1(V) & \xrightarrow{j_U^* - j_V^*} & H_{\text{dR}}^1(U \cap V) & \xrightarrow{\delta} \\
 & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & \\
 & & H_{\text{dR}}^2(M) & \xrightarrow{(i_U^*, i_V^*)} & H_{\text{dR}}^2(U) \oplus H_{\text{dR}}^2(V) & \xrightarrow{j_U^* - j_V^*} & H_{\text{dR}}^2(U \cap V) & \xrightarrow{\delta} \\
 & & \downarrow & & \downarrow & & \downarrow & \\
 & & H_{\text{dR}}^3(M) & \xrightarrow{(i_U^*, i_V^*)} & \dots & & &
 \end{array}$$

δ の構成や完全性の証明については、Lee の 15 節、Tu の 25 節および 26 節などを見よ。

10.3 $n \geq 1$ に対し、 S^n の de Rham コホモロジー群が

$$H_{\text{dR}}^k(S^n) \cong \begin{cases} \mathbb{R}, & k = 0, n, \\ 0, & 0 < k < n \end{cases}$$

で与えられることを示せ。[ヒント：数学的帰納法。 $U = S^n \setminus \{(0, \dots, 0, 1)\}$ 、 $V = S^n \setminus \{(0, \dots, 0, -1)\}$ において Mayer–Vietoris 完全列を用いる。]

10.4 $\mathbb{R}^n \setminus \{p_1, p_2\}$ の de Rham コホモロジー群を決定せよ。ここで p_1, p_2 は \mathbb{R}^n の相異なる 2 点。

10.5 複素射影空間 $\mathbb{C}P^n$ の de Rham コホモロジー群を決定せよ。

10.6 実射影空間 $\mathbb{R}P^n$ の de Rham コホモロジー群を、できるだけ大きな n まで決定せよ。